

夏目漱石の聖書

鈴木範久 立教大学教授

三四郎

夏目漱石の『三四郎』は、一九〇八（明治四十一年）九月から十二月にかけて『東京朝日新聞』に連載された小説である。最後の方で、三四郎が教会の前で美禰子（ミミコ）を待っていると、やがて礼拝を終えた美禰子が姿を現す。結婚の決まった彼女は三四郎に向かって、聞き取れないような声でつぶやいた。

「われは我が慰を知る。我が罪は常に我が前にあり」

二人は、こうして別れるのであるが、その言葉の前にも、漱石はしきりと「迷羊」（ストレイ シープ）の言葉を用いている。

美禰子のつぶやいた言葉も「迷羊」も、ともに聖書の言葉である。

かなり以前のことになるが、若手の漱石の研究者から、美禰子のもらした言葉のことで、漱石の用いた聖書は何かと問われたことがある。そのときは、同じ表紙が、いわゆる委員会訳の旧約聖書詩篇五篇三節に出てくるので、たぶん、それであろうと答えておいた。委員会訳の旧約聖書は一八八七（明治二十年）年に完成、翌年には一冊にまとめられている。

ところが、内心気になっていたことがあった。それは、委員会訳では、同じ言葉が、発音は同じだが、表記となると、次のように少し異なっていた点である。

「われはわが慰をしる、わが罪はつねにわが前にあり」

漱石の『三四郎』では、「わが」と「しる」が、いずれも「我が」と「知る」の

ように漢字が用いられていた。

漱石の聖書

その後、漱石の蔵書目録である「漱石山房蔵書目録」（岩波版「漱石全集」収録）により、漱石が『旧約聖書』（明治三十七年、横浜 米田聖書会社）を所蔵していたことを知った。漱石の蔵書の多くは東北大学に収められたのであるが、肝心のこの聖書はない。だが、「明治三十七年」という年は、比較的多数の聖書が刊行され、残されている。それらで調べても、漱石と同じ漢字表記のものは見出されなかった。

しかし、全く同一の文字を使用した書物があつたのである。それは、やはり「漱石山房蔵書目録」に記された『日本聖公会祈祷書』（明治三十九年、神戸 日本聖公会）である。これも所在不明のため、同じ年の刊本によるしかないが、なんとその「早祷」のところに、全く同じ漢字で記された詩篇五篇三節の文が収められていたのである。

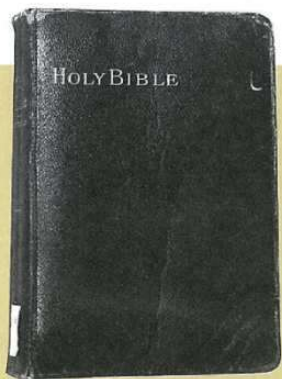
日本の聖公会では、祈祷書は聖書に劣らず重要な位置を占めていた。日本に伝道後まもなく、イギリスの祈祷書の直訳に近いかたちで作成されたが、日本聖

公会成立後、公式に認められた祈祷書は一八九五（明治二十八年）年刊行（翌年公認）の『日本聖公会祈祷書』である。漱石が所蔵していた一九〇六（明治三十九年）版『日本聖公会祈祷書』は、その一九〇六年版の重版とみてもよい。

一九〇六年版なら、一九〇八年連載の『三四郎』と時間的には合うことになる。そうすると『三四郎』に登場する聖句は、直接には聖書からではなく『日本聖公会祈祷書』から漱石は取ったのではなからうか。

英文聖書

漱石の用いた聖書で、唯一、所在が判明しているものは、英文聖書である。最近になり、東北大学に赴き、はじめて漱



漱石が使用した英文聖書
（東北大学図書館蔵）

石の英文聖書を閲覧、調査する機会を与えられた。

その英文聖書は、一八九八年にオックスフォードから出版された改訂訳（RV）で、旧約、新約ともに含まれている。表紙裏には「Natsume San / With Mrs. Nott's most / kind regards / S. S. Preussen / 10th October 1900」との献辞が記入してある。すなわち、漱石が、一九〇〇（明治三十三年）年秋、プロイセン号にてイギリス留学に向かう船上で、旧知のミセス・ノットから贈られた聖書である。

聖書を贈ったミセス・ノットは、熊本で伝道していた聖公会（CMS）の宣教師ミス・ノット（Grace Nott）の母親で、たまたま熊本娘のところに滞在中、漱石を知ったものと思われる。ミス・ノットは漱石の勤めていた五高でバイブル・クラスも開いていた。

英文聖書には文字による書き込みが数カ所あるほか、若干の下線および傍線部分がある。紙数に制約があるので、ここでは、一点だけ触れたい。それは、漱石が線を付したところを見ると、男と女、親と子、結婚にかかわる聖句が目立つ点である。



『三四郎』第116回（1908年12月28日）
『東京朝日新聞』より

漱石の聖書によって見るかぎり、漱石と聖書との関係は、男女、夫婦をめぐる問題、そこに集約される人間の罪の問題であつたような気がしてならない。もし、そうだとするならば、一見、キリスト教や聖書よりも、樺にひかれた漱石ではあるが、この視点から、漱石の文学と聖書との関係を、改めて見直す必要があるかもしれない。『三四郎』の美禰子の「我が罪」は意味深長である。

また、今回判明したように、聖書とともに祈祷書との関係からも、漱石の作品を読み直すことが生じてくるであろう。イギリスのキリスト教と熊本の聖公会が、漱石にとり最も近いキリスト教であつたからである。